

[原著論文]

## 作業療法士および言語聴覚士養成課程大学生の学習を促進する要因の検討

須藤 美香<sup>1)</sup>、平岡 恭一<sup>2)</sup>、石井 陽子<sup>1)</sup>

### 要 旨

本研究の目的は、作業療法士および言語聴覚士養成課程に所属する大学生の学習を促進する要因を探り、教育上の示唆を得ることである。A大学1～3年生を対象にアンケート調査を行い、先行研究にて学習との関連が報告されている進路決定プロセス、職業的アイデンティティ、なりたい気持ち、職業イメージ、セルフ・コントロールの様相を明らかにした。その上で、これらの変数が3種の学習方略（認知的学習方略、メタ認知的学習方略、自律的調整方略）の使用を促進するとの方向性のある仮説モデルを作成し、重回帰分析により検討した。分析の結果、本研究の仮説モデルは大筋で支持された。すなわち、肯定的な職業イメージがなりたい気持ちを高め、職業的アイデンティティを経由して、学習方略の能動的な使用に影響を与えていた。また、入学時点でリハビリの対象となる患者像を具体的に知っていたかどうか、職業的アイデンティティに少なからず影響した。

本研究結果から、リハビリ専門職教育においては職業的アイデンティティの涵養が重要であることが示された。職業的アイデンティティの涵養のためには、業務内容や職業像が捉えにくいというリハビリ専門職の特徴に留意しながら、学生が職業イメージをスムーズに形成できるよう支援すること、そして学生の多様な入学経過を念頭に置き、なりたい気持ちを顧慮することが有効と考えられた。

キーワード：リハビリ専門職大学生、職業イメージ、なりたい気持ち、職業的アイデンティティ、学習方略

### I. はじめに

本研究の目的は、作業療法士（以下OT）および言語聴覚士（以下ST）養成課程大学生の学習を促進する要因を探ることである。大学進学率が年々上昇<sup>1)</sup>するなか、基礎学力や学習習慣の不足<sup>2)</sup>、入学動機の不明確さ<sup>3-5)</sup>の問題も指摘されている。社会情勢に応じる質の高い医療専門職の養成は今日の課題であるため、教育上の示唆を得ることを目指す。

本研究目的を達成するにあたり以下の5変数を設定した。これらのうち幾つかは、先行研究にて要因間の関連が部分的に明らかとなっている。しかしながら、リハビリ専門職教育では十分に検討されているとはいえず、そのなかでもST学生を対象とした調査は見当たらない。

まずは、職業的アイデンティティである。職業的アイデンティティとは、社会的役割の一つである職業を通して形成、確立される自我同一性である<sup>6,7)</sup>。入学時の専門職像が明確で、自律的な進路決定をした学生では職業

的アイデンティティが高い<sup>8)</sup>とされる。また他職種との比較において藤井ら<sup>9)</sup>は、業務内容の独自性が明確な職種で高くなると考察している。落合ら<sup>10)</sup>は、医療系大学生の職業的アイデンティティを横断的に調査し、入学動機や専門職像が不明確な状態で入学した者では、大学4年間を通して職業的アイデンティティが形成されにくい問題を提起している。

次に、なりたい気持ちと職業イメージである。OTと理学療法士（以下PT）学生を対象に、なりたい気持ちと職業イメージには有意な相関関係があり<sup>11)</sup>、職業イメージが高く、なりたい気持ちが強い学生では、内発的な学習動機が有意に高い<sup>12)</sup>とされる。また、自分のなりたい職業であった学生では、学習そのものに価値を感じる<sup>3)</sup>との報告もある。

加えて、本研究ではセルフ・コントロールに着目する。価値割引課題にて測定されたセルフ・コントロールは、欧米では学業成績との相関が認められている<sup>13,14)</sup>。医療系大学では、暗記事項が多い医学系の基礎科目の継続的

1) 弘前医療福祉大学保健学部（〒036-8102 青森県弘前市小比内3丁目18-1）

2) 弘前医療福祉大学短期大学部（〒036-8102 青森県弘前市小比内3丁目18-1）

な学習や、国家資格取得という長期的目標の達成のため、他の学部生よりも一際セルフ・コントロールの実行力が必要になると推察する。

最後に、入学時点でリハビリの対象となる患者像を具体的に知っていたかどうか（以下リハビリ対象者像の具体性）も変数に取りあげる。伊田<sup>15)</sup>を参考に次のように予測する。入学のきっかけが学生自身や親類などのリハビリ体験であった者、あるいは小中学校からリハビリ職を志望していた者では、目指す将来像や目標が明快であるため職業的アイデンティティが高く、学修を自分なりに価値づけながら能動的に学習するであろう。

本研究では、これら5変数が学習を促進するとの方向性のある仮説モデルを作成し、検証する。この目的において、学習を学習方略と操作的に定義する。

学習方略は様々あるが、主体的な学びに力点を置く自己調整学習においては、認知的側面と動機づけの側面が重視される<sup>16)</sup>。認知的側面には認知的学習方略（記憶材料のリハーサルや体制化など学習を促進する方略）とメタ認知的学習方略（学習計画の立案、学習の進捗の自己評価などの方略）があり、直接的または間接的に学習成績に影響を与える<sup>17-19)</sup>。動機づけの側面には自律的調整方略（やる気や環境の調整、学習の意味づけなどに関する方略）があり<sup>20)</sup>、学習の取り組みとその持続性に働く<sup>19-21)</sup>。医療系大学生を対象とした学習方略研究は極めて少ないが、PT学生において上記の関係の概略は一致している<sup>22-24)</sup>。

ところで、医療系大学生の学習について検討する際に考慮しなければならないのは、入学経過の特殊性である。すなわち、他の学部とは異なり、専攻分野や受験する大学の選択よりも職業の決定が先行する<sup>25)</sup>。これに加えて、入学後の学修が職業と直結しているため、入学動機や進路決定までの過程は特段重要である。それは、大学での学びに影響する<sup>3, 10, 26)</sup>だけでなく、臨床実習の達成感<sup>27)</sup>や大学生活のストレス度合い<sup>28)</sup>をも左右する。

この進路決定までの過程と志望時期は職種により異なる。医療系大学生の「進路決定プロセス」には一般大学生が示す4類型<sup>29)</sup>に加え「出会い型」があり<sup>30)</sup>、OTやPT学生の半数近くを占めることが時折報告されている<sup>10, 31)</sup>。この出会い型は、小さい頃から人のために役立ちたいと考えており、高校（中学校）で具体的な職業に出会うことで進路決定するタイプである。一方、小学校（中学校）の頃に目指す職業を決定したタイプは、看護師学生の約4割を占めるが、OTやPT学生では5～10%程度と非常に少ない<sup>10, 31, 32)</sup>。

医療系のなかでも、とりわけリハビリ専門職は、職業の認知度の低さも影響し、業務内容や職業像が捉えにくいという特徴をもつ<sup>3, 33-35)</sup>。この点は、看護師や放射線

技師など業務内容が比較的イメージしやすい職種<sup>9, 36)</sup>と相違がある。以上のことから、リハビリ専門職大学生の入学後の学習の在り方は、他の医療職とは異なる側面をもつ可能性がある。本研究では対象者のこのような特殊性を考慮しつつ進めたい。

## II. 方法

### 1) 対象者

対象者はA県内の医療系大学に在籍するOT学生128名およびST学生62名である。入試制度は進路選択に影響すると考えられ、また評価実習、総合実習の経験は職業的アイデンティティに影響することが示されている<sup>37-40)</sup>。よって、入試制度がほぼ同一で、実習未経験である1～3年を対象とした。

### 2) 手続き

アンケート調査を2019年7月17日～8月6日の期間で行った。アンケート項目は以下の通りである。

#### (1) 進路決定プロセス、職業的アイデンティティ

進路決定プロセスは落合ら<sup>10)</sup>の5種類の説明文（表1）を提示するとともに、その他を設け択一式とした。さらに本研究では、出会い型には当該の職業を知ったきっかけを多肢選択で尋ねた。この選択肢は、進学情報誌や親類等からの勧めと、学生自身・親類のリハビリ経験やその見聞に大別された。前者を情報型、後者を体験型と命名し集計した。

職業的アイデンティティも同様に落合ら<sup>10)</sup>の尺度を用い、7件法で尋ねた。この尺度は藤井ら<sup>9)</sup>によって4因子構造が確認され、医療系大学生を対象にしばしば使用されている<sup>31, 32)</sup>。4因子（F1「医療職選択への自信」、F2「自分の医療職観の確立」、F3「医療職として必要とされることへの自負」、F4「社会貢献への志向」）ごとの平均値を下位尺度得点とし、平均合計得点とともに算出した。

#### (2) 職業イメージ、なりたい気持ち

職業イメージは「あなたはOT/STがどのような職業かイメージがはっきりしていると思いますか」、なりたい気持ちは「あなたはOT/STになりたいと思いますか」と尋ねた。測定には武井ら<sup>11)</sup>を参考にVisual Analogue Scaleを使用し、0～100に数値化した。

#### (3) セルフ・コントロール

セルフ・コントロールの測定には遅延価値割引課題を用いた。これは即時に得られる小さな報酬と将来得られる（遅延される）大きな報酬を対提示し、どちらを選択するか問うものである。主観的価値が割引かれにくい後者を選択することは、セルフ・コントロールと呼ばれる。回答は換算式によりAUC（Area under the Curve）

表1 進路決定プロセス5類型（落合ら<sup>10)</sup>より引用）

類型	説明
早期決定型	小学校（中学校）ぐらいから漠然と現在自分の所属している医療職（OT/ST）を考え、その職業に就いている自分をイメージし、しかも周囲も勧めたので、意思が強まり、ほぼ希望通りの進学をし、進路には納得している。
直前決定型	大学入試の受験手続き直前までどんな職業に就くかがはっきりせず、直前になって大きな葛藤を伴って決定したが、自分の決定に関しては納得して受け入れている。
回避型	いつまでもどのような進路に進むかがはっきりしないまま、そのときあった話に乗って合格してしまっただが、将来就くであろう医療職の職業に対するイメージもはっきりせず、自分の決定だという納得もできていない。
途中変更型	小学生頃からなりたいと決めていた職業（医療職とは限らない）があったが、中学・高校になって、成績による進学先の調整、両親などの周囲の反対等があり、大きな葛藤があって進学先を現在所属している専攻に変更したが、変更前の職業への思いが残っている。
出会い型	漠然と病院で働きたいとか、医療職に就きたいと考えていたが、高校生（中学生）時代に、祖父母や自分の病院通院や大学案内を見るなどの何らかのきっかけで今の職業があることを知り、これが自分が考えていた職業だったのだと納得し、それ以来その進路に進もうと決めている。

と称される0～1までの数値に変換した。値の大きい方がセルフ・コントロール力が高いことを表す<sup>41)</sup>。

#### (4) 学習方略

学習方略の測定には、大学生用に作成された梅本<sup>19)</sup>の尺度を用いた。学習方略3種、計39項目の質問例を示す。認知的学習方略12項目は、「用語などを覚える時は繰り返し書いて覚える」「ノートに自分なりにまとめ直して勉強する」などである。メタ認知的学習方略6項目は、「自分で決めた勉強計画にそって勉強する」「自分が分からない所はどこか見つけようとしながら勉強する」などである。自律的調整方略21項目は、「勉強の内容が将来役に立つと考える」「自分の好きな場所で勉強する」などである。学習方略の使用について「あなたは学習する際、次の方法を使いますか」と5件法で尋ね、3種の学習方略の平均値を算出した。数値の高さは方略使用の頻度が高いことを示す。

なお、上記以外にも質問項目を設けたが、本報告の主旨には沿わないため割愛する。

統計学的分析にはExcell統計2014およびSPSS ver.26を使用した。

#### 3) 倫理的配慮

対象者に研究の趣旨説明を口頭および文書で行った。自記式無記名アンケートのため、回答の提出をもって協力の同意とすることを十分に説明した。研究への参加は自由であり、その可否は学業成績やあらゆる学生生活場面に影響しないこと、回答内容のプライバシーは保護されることなども説明した。回収には、回収箱を付置した。本研究は弘前医療福祉大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号2019-1）。

### Ⅲ. 結果

回答数はOT学生121、ST学生62、計183であった（回収率はそれぞれ96.1%、100%）。全体で現役入学181名、社会人入学2名であり、そのうち男性57名、女性126名であった。各質問項目において回答に著しい欠損値がある場合は、その質問項目を分析対象から除いた。よって有効回答数は質問項目で若干異なる。結果を表2、3に示す。

#### 1. 5変数の特徴

進路決定プロセス各類型の割合を確認するため、養成課程別に $\chi^2$ 検定で検討したところ有意差は見られなかった。OT、ST学生ともに出会い型が4割程度と最も多く、情報型、体験型はそれぞれ半数を占めた。回避型は両学生ともに全体の10%未満で非常に少ない結果であった。なお、この回答から、早期決定型と出会い体験型を、それ以外の類型と2群に分け数値化し、リハビリ対象者像の具体性という変数に変換した。

職業的アイデンティティ4因子については、養成課程別の特徴を把握するため、養成課程と下位尺度の2要因分散分析にて検討した。職業的アイデンティティの主効果が有意であり（ $F(1,181)=112.07, p<.01$ ）、多重比較の結果、F1～F3に比しF4「社会貢献への志向」が有意に高い値であった。養成課程の主効果は有意ではなかった（ $F(1,181)=3.43, p=.07$ ）が、STの方がOTより高い値を示した。また、進路決定プロセス5類型別でも下位尺度得点を分析すると、4因子全てにおいて回避型が有意に低い結果であった（F1:  $F(4, 171)=10.71$ , F2:  $F(4, 171)=6.71$ , F3:  $F(4, 171)=5.37$ , F4:  $F(4, 171)=8.18$ , いずれも $p<.01$ ）。

なりたい気持ちと職業イメージは、進路決定プロセス5類型別の様相を確認するため、5類型と学年の2要因分散分析にて検討した。なりたい気持ち、職業イメージともに、5類型の主効果が有意であり（それぞれ $F(4, 160)=11.01, p<.01, F(4, 161)=4.31, p<.01$ ）、回避型の顕著な低さが確認できた。特になりたい気持ちでは、学年の単純主効果も有意であった（ $F(2, 161)=3.70, p<.05$ ）。多重比較の結果、途中変更型の3年に低い値を認めた。とりわけ職業イメージについては、養成課程によって平均値が異なると思われたため分析した。結果は有意ではなかったものの、OT学生の早期決定型で職業イメージが低い傾向にあった。

AUCは学年が上がるにつれ大きくなり、セルフ・コントロール力が高まっている状態が確認できたが、統計学的な差は認められなかった。

## 2. 仮説モデルの検討

上記結果1より、OT、ST学生における各変数の様相は、大勢に差が認められなかったため同一の集団として分析した。設定した5変数の相関係数と多重共線性について確認した後、仮説モデルに基づき、変数を段階的に投入する重回帰分析（ステップワイズ法）を行った（松井<sup>42</sup>、浦上<sup>43</sup>を参考）。偏回帰係数の有意水準を5%として投入を打ち切った。得られたパス図を図1に示す。第1段階では独立変数を職業イメージとリハビリ対象者像の具体性、従属変数をなりたい気持ちとして分析した結果、職業イメージのみ有意な変数として抽出された。第2段階では、第1段階の3変数を独立変数とし、従属変数は職業的アイデンティティとして分析した結果、なりたい気持ちとリハビリ対象者像の具体性が有意な変数として抽出された。第3段階では、第2段階の4変数にセルフ・コントロールを加えた5変数を独立変数とし、従属変数を3種の学習方略それぞれとし解析した。5変数のうち3種の学習方略に対する有意な変数として

抽出されたのは、職業的アイデンティティのみであった。

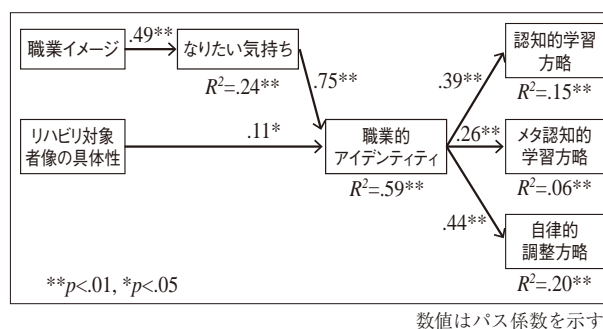


図1 各変数と学習方略との関連 (N=158)

## IV. 考察

### 1. 5変数の特徴

本研究で対象のOT、ST学生における5変数の特徴は、以下の3点にまとめられる。

一つ目は、進路決定プロセス5類型の割合であり、これは先行研究結果<sup>10, 31</sup>と大きな相違はなかった。回避型の割合は、本研究を含むいずれの調査においても5~10%程度であり、一般の学部<sup>44</sup>に比べて非常に少ないと判断できるものの、医療系大学であっても一定数存在し、その他、途中変更型や直前決定型などが4分の1程度を占める。進路選択は保護者の意向<sup>3, 45</sup>や学生の就職に対する価値観<sup>4, 46</sup>なども反映される複雑な問題であるが、多様な学生の入学を想定した教育の必要性は、本研究結果からも改めて確認できた。

二つ目は、なりたい気持ちと職業イメージである。進路決定プロセス5類型の回避型では、職業的アイデンティティが3学年を通して有意に低だけでなく、なりたい気持ち、職業イメージともに有意に低い状態が認められた。回避型の職業的アイデンティティ形成の困難さは既報<sup>10</sup>の通りであるが、本結果からはその根底にな

表2 養成課程および学年別の進路決定プロセス各類型の人数

対象	早期決定	直前決定	回避	途中変更	出会い	その他	合計
OT	17 (14.0)	20 (16.5)	11 (9.1)	22 (18.2)	48 (39.7)	3 (2.5)	121
					情報型 27 体験型 21		
ST	3 (4.9)	13 (21.3)	4 (6.6)	11 (18.0)	27 (44.3)	3 (4.9)	61
					情報型 15 体験型 12		
1年	9	10	3	13	28	3	182
2年	7	7	5	8	23	1	
3年	4	16	7	12	24	2	

カッコ内の数値は%  
二重線の上段は養成課程別、下段は学年別の人数

表3 各質問項目に対する回答の平均値

項目	養成課程	1年	2年	3年
なりたい 気持ち	OT	80.70 (17.47)	64.38 (30.79)	68.02 (21.88)
	n	46	26	49
	ST	83.88 (18.35)	83.70 (20.12)	76.72 (17.21)
	n	20	25	16
職業イメージ	OT	70.41 (16.34)	55.81 (18.51)	70.59 (15.85)
	n	46	26	49
	ST	65.30 (17.77)	74.00 (15.90)	74.73 (21.96)
	n	20	25	16
セルフ・コン トロール (AUC)	OT+ST	0.39 (0.25)	0.40 (0.30)	0.44 (0.27)
	n	52	48	60
職業的 アイ デン (得点)	F1	OT	5.10 (1.11)	
		ST	5.42 (0.91)	
	F2	OT	5.05 (1.06)	
		ST	5.25 (1.03)	
	F3	OT	5.13 (1.05)	
		ST	5.45 (0.94)	
	F4	OT	5.79 (0.92)	
		ST	5.98 (0.85)	
n	OT 121、ST 62			

項目	養成課程	早期決定	直前決定	回避	途中変更	出会い	
なりたい 気持ち	OT	77.59 (18.84)	75.00 (19.94)	40.64 (19.92)	66.11 (25.61)	78.48 (20.90)	
	n	17	20	11	22	48	
	ST	82.00 (17.09)	83.50 (13.67)	53.25 (32.16)	81.91 (20.89)	85.59 (14.28)	
	n	3	12	4	11	27	
職業イメージ	OT	61.41 (14.47)	71.45 (13.98)	54.09 (18.44)	66.77 (20.56)	70.81 (17.13)	
	n	17	20	11	22	48	
	ST	76.33 (20.98)	71.23 (18.86)	57.25 (24.34)	73.82 (14.57)	73.59 (15.71)	
	n	3	13	4	11	48	
セルフ・コン トロール (AUC)	OT+ST	0.35 (0.28)	0.44 (0.29)	0.40 (0.26)	0.46 (0.28)	0.38 (0.26)	
	n	18	29	14	30	63	
職業的 アイ デン (得点)	F1	OT+ST	5.63 (0.90)	5.35 (0.74)	3.88 (0.94)	4.83 (1.08)	5.41 (0.96)
		OT+ST	5.35 (0.73)	5.26 (0.88)	3.85 (0.93)	5.10 (1.16)	5.14 (0.98)
	F2	OT+ST	5.42 (1.04)	5.45 (0.83)	4.13 (1.03)	5.27 (1.04)	5.27 (0.98)
		OT+ST	6.14 (0.63)	5.90 (0.66)	4.70 (0.92)	5.76 (1.11)	5.98 (0.79)
	F3	OT+ST	5.63 (0.90)	5.35 (0.74)	3.88 (0.94)	4.83 (1.08)	5.41 (0.96)
		OT+ST	5.35 (0.73)	5.26 (0.88)	3.85 (0.93)	5.10 (1.16)	5.14 (0.98)
	F4	OT+ST	5.42 (1.04)	5.45 (0.83)	4.13 (1.03)	5.27 (1.04)	5.27 (0.98)
		OT+ST	6.14 (0.63)	5.90 (0.66)	4.70 (0.92)	5.76 (1.11)	5.98 (0.79)
n	20	33	15	33	75		

カッコ内の数値は標準偏差  
二重線より上段は学年または養成課程別、下段は進路決定プロセス別の集計値

りたい気持ちや職業イメージの高まりにくさがあると推察する。自己決定理論<sup>47)</sup>に立脚すると、回避型の自律性に欠ける進路選択は、学習を含む学生生活全般に対する動機づけを低下させる。生涯発達の視点からは青年期のアイデンティティの課題<sup>7)</sup>でもあるため、個別支援が必要となろう。

本研究では、特に進路決定プロセス途中変更型の3年でなりたい気持ちが有意に低いという結果も示された。リハビリ専門職養成教育では3年次から専門科目が主となる。それに伴い、本命進路を諦めた途中変更型では、入学以前に志望していた職業に対する思いや現在の進路に対する迷いが沸き上がるため、なりたい気持ちが低下したと推測する。この点については単年度の横断的調査による結果であることから、継続した検討が必要である。

また、有意差は認められなかったが、OT学生の早期決定型で職業イメージの低さが確認できた。職業の認知度も考慮すると、OTを小学校(中学校)から志望していた早期決定型の場合、業務内容や職業像の捉え方が、自己の体験に基づいた極めて限定的な状態であった可能性が高いと思われる。学修が進み、OT対象領域の広さや複雑性<sup>3,9)</sup>に触れるなかで、当初抱いていた職業像の転換を求められたことが、職業イメージの低さにつながったと推測する。逆にいうと、業務内容や職業像を適切に捉えられれば、肯定的な職業イメージに転換する可能性があり、教員による支援の対象になり得ると考える。

三つ目は職業的アイデンティティである。ST学生の方がOT学生より4因子全てで高い傾向が見られた。藤井ら<sup>9)</sup>は、看護師やPT、OT学生に比べ放射線技師学生で職業的アイデンティティが高かったことから、業務内容の独自性が明瞭な職種で高くなると考察している。上述したOT対象領域の広さや複雑性<sup>3,9)</sup>などの特徴も勘案すると、ST対象領域は言語や聴覚、発声発語の障害などと、資格の名称からも捉えやすく、OTに比し職種の専門性や独自性を理解しやすいといえる。このことがST学生の職業的アイデンティティの高い傾向につながったと考えられる。

## 2. 学習を促進する要因の検討

本研究で設定した仮説モデルは大筋で支持された。得られたパス図より以下の解釈が可能である。OTまたはSTに対する肯定的な職業イメージに動機づけられ、なりたい気持ちは高まる。入学後の学修を通して当該の職業の専門性や独自性を理解し、社会的な職業の意味を自己認識していくなかで「こころざし」<sup>48,49)</sup>、つまり当該の職業になりたいという目的意識が明確となれば、職業的アイデンティティが涵養されながら学修に価値が見出される。一方、入学時点において、リハビリの対象となる患者像を具体的にもち得ていることは、職業的アイデ

ンティティに少なからず影響を与える。その結果、学習方略の使用が能動的に行われ、学修は自律的に深まっていく。

以上の結果は、先述した各変数の関連を示す先行研究結果とも概ね整合する。各変数は職業的アイデンティティを経由して学習方略に影響したことから、リハビリ専門職教育においては職業的アイデンティティの涵養が重要である。職業的アイデンティティを高める教育実践は近年しばしば報告されている。臨床実習<sup>37-39)</sup>はもちろんのこと低年次の介入実習<sup>40)</sup>、また、職業モデルの存在<sup>50)</sup>、教授内容の工夫<sup>51,52)</sup>などである。この他、本研究結果から有効と考えられた教育上の取り組みは以下の三つである。

一つには、学生の職業イメージがスムーズに形成されるよう支援することである。先述したように、リハビリ専門職には業務内容や職業像が捉えにくい<sup>3,33-35)</sup>という特徴がある。また落合ら<sup>51)</sup>や村田<sup>53)</sup>は、職業的アイデンティティを形成途中の学生が患者を中心とする医療・リハビリを強調されると、負担感が生じマイナスに作用すると論じている。本研究結果に照らし合わせると、まずは学生に対して社会的役割や業務内容など職業の概要の理解を促し、OTやSTの専門性、独自性の強調は段階的に進めることが望ましい。

二つ目には、学生のなりたい気持ちを顧慮することである。本研究結果から、なりたい気持ちは、職業的アイデンティティの形成、ひいては学習の継続性に影響を与えることが示唆された。大学全入時代ともいわれ、多様な学生がリハビリ専門職養成課程に入学することは避けられないため、教員には学生のなりたい気持ちを動機づけ、育む姿勢が必要であり、その際には進路決定プロセスの途中変更型や回避型に対する支援が肝要となる。

三つ目には、入学直後の超早期に臨床現場の見学を行うことを提案する。本研究結果より、入学時点でリハビリの対象となる患者像が明確であることは、入学後の学修を通して職業的アイデンティティを高める可能性が示された。特に、業務内容や職業像、さらにはその専門性が捉えにくいリハビリ専門職において、早い時期の臨床現場の体験は、その後の学修にプラスの影響を与えると考える。これは同時に職業モデルを意識する機会にもなり得るため、職業的アイデンティティの涵養に良いであろう。

これまでリハビリ専門職大学生を対象に、学習を促進する要因間の関連性全体を捉え、整理した研究は見当たらない。よって本研究は、リハビリ専門職教育の深化に寄与するものと考え。今後は本研究で設定したモデルの適合度検証に向けて、リハビリ専門職3職種の大学生におけるデータの蓄積が求められる。

## 謝 辞

本研究にご協力いただいた学生の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は2019年度弘前医療福祉大学学長指定研究の助成を受けて実施した。なお、本研究のうち5変数の特徴の一部は第6回保健科学研究会（2019年9月）にて、また仮説モデルに関する部分は第7回保健科学研究会（2020年9月）にて発表した。

## 著者の役割分担

須藤美香：研究計画立案、データ収集、統計分析、論文執筆

平岡恭一：研究計画立案、統計分析、論文修正

石井陽子：研究計画立案、データ収集・計測・分析、論文修正

## 文 献

- 1) 文部科学省：学校基本調査—平成30年度結果の概要. 2018. [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afieldfile/2018/12/25/1407449\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2018/12/25/1407449_1.pdf) (最終閲覧日：2020/5/20)
- 2) 大村雄史：大学生学力低下問題の構造分析. 生駒経済論叢. 6 (2): 71-92, 2008.
- 3) 小橋一雄, 石井孝弘, 黒川喬介他：本学作業療法学科学生の学習に対する価値の傾向—学科の選択理由と課題価値との関連. 帝京科学大学紀要. 15: 153-159, 2019.
- 4) 金子千香, 平林茂, 菅沼一男他：専門職への意識と大学生活に対する入学前のイメージとが理学療法学科新入生に及ぼす影響. 理学療法科学. 30(4): 595-598, 2015.
- 5) 池田望：本当に作業療法士になりたい学生が減ってきているんじゃない?. 日本作業療法協会ニュース. 323: 12, 2008.
- 6) Erik HE: 自己アイデンティティの問題. アイデンティティとライフサイクル(初版). 西平直, 中島由恵訳. 111-192. New York: WW Norton & Company. 2011.
- 7) Coleman JC, Hendry LB: 自己とアイデンティティ. 青年期の本質 (初版). 白井利明, 若松養亮, 杉浦和美訳. 61-87. London: Routledge. 2003.
- 8) 本多陽子, 落合幸子：医療系大学生の進路決定プロセス尺度作成の試み—進路決定プロセスの類型と職業的アイデンティティからの検討. 茨城県立医療大学紀要. 11: 45-54, 2006.
- 9) 藤井恭子, 野々村典子, 鈴木純恵他：医療系学生における職業的アイデンティティの分析. 茨城県立医療大学紀要. 7: 131-142, 2002.
- 10) 落合幸子, 本田陽子, 落合良行他：医療系大学への進路決定プロセスと入学後の職業的アイデンティティとの関連. 医学教育. 37(3): 141-149, 2006.
- 11) 武井圭一, 和田佐和子, 久保日向他：理学療法学生および作業療法学生における職業イメージとモチベーションの検討第2報. 健康科学大学紀要. 3: 77-83, 2007.
- 12) 水池千尋, 大城昌平, 重森健太他：本学理学療法学専攻1年次生の学習動機と職業意識. 聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部紀要. 1: 83-90, 2005.
- 13) Kirby KN, Winston GC, Santiesteban M: Impatience and grades: Delay-discount rates correlate negatively with college GPA. Learning and Individual Differences. 15 (3): 213-222, 2005.
- 14) Freeney Y, O'Connell M: Wait for it —Delay-discounting and academic performance among an Irish adolescent sample. Learning and Individual Differences. 20(3): 231-236, 2010.
- 15) 伊田勝憲：教員養成課程学生における自律的な学習動機づけ像の検討—自我同一性、達成動機、職業レディネスと課題価値評定との関連から. 教育心理学研究. 51: 367-377, 2003.
- 16) 伊藤崇達：自己調整学習研究の問題点. 自己調整学習の成立過程 (初版). 1-33. 京都市：北大路書房. 2009.
- 17) 篠ヶ谷圭太：学習方略研究の展望と展開—学習フェイズの関連づけの視点から. 教育心理学研究. 60: 92-105, 2012.
- 18) 藤田正：メタ認知方略と学習課題先延ばし行動の関係. 教育実践総合センター研究紀要. 19: 82-86, 2010.
- 19) 梅本貴豊：メタ認知的方略、動機づけ調整方略が認知的方略、学習の持続性に与える影響. 日本教育工学会論文誌. 37(1): 79-87, 2013.
- 20) 梅本貴豊, 田中健史郎：大学生における動機づけ調整方略. パーソナリティ研究. 21(2): 138-151, 2012.
- 21) 梅本貴豊, 伊藤嵩達, 田中健史郎：調整方略、感情のおよび行動的エンゲージメント、学業成果の関連. 心理学研究. 87(4): 334-342, 2016.
- 22) 梅野和也, 太田研吾, 井元淳他：自己調整学習方略および学習目標が定期試験の結果に与える影響—理学療法学科学生を対象とした研究. 理学療法科学.

- 32 (1): 69-72, 2017.
- 23) 新地昭彦: 学習ストラテジー調査と成績との関連性. 九州理学療法士・作業療法士合同学会2016. : 38, 2016.
- 24) 永禮敏江, 山本洋之: 理学療法学科1年生の自己調整学習方略と学習動機づけの関連性. リハビリテーション教育研究. 20: 300-305, 2015.
- 25) ベネッセ教育総合研究所: 大学生の進路選択過程. 平成17年度経済産業省委託調査進路選択に関する振り返り調査—大学生を対象として: 1-89, 2005. <https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/shinrosentakaku/2005/pdf/shinrosentakaku04.pdf> (最終閲覧日: 2020/5/20)
- 26) 森川恵子: 学生の志望動機と志願時期が学習活動へ及ぼす影響に関する検討. 日本放射線技師教育学会論文誌. 5(1): 15-21, 2013.
- 27) 清水美恵, 古株ひろみ, 本田可奈子他: 看護学生の志望動機と実習達成感、看護職の職業的アイデンティティとの関係. 人間看護学研究. 13: 1-7, 2015.
- 28) 大島和子, 福島和代: 看護大学生の職業志望動機とストレス. 心身健康科学. 13(2): 62-71, 2017.
- 29) 河崎智恵: アイデンティティを育てる教育. アイデンティティ障害発達論の射程 (初版). 岡本祐子編. 231-267. 京都市: ミネルヴァ書房. 2002.
- 30) 本多陽子, 落合良行: 重要な決定にまつわる心理的特性からみた医療系大学生の進路決定プロセスの特徴. 筑波大学心理学研究. 28: 79-87, 2004.
- 31) 田中陸英, 吉田健, 小川敬之: 作業療法学生の進路決定プロセスと入学後の就学意欲、自己効力感および職業的アイデンティティとの関連. 日本作業療法学会抄録集. 51: 483, 2017.
- 32) 藤森由子, 藤田絹代, 鈴木智子他: 地方私立看護系大学生における職業的アイデンティティと進路決定プロセスの関連. 日本看護学教育学会誌. 27(1): 53-60, 2017.
- 33) 白濱勲二, 安田大典: 神奈川県内高校生の医療福祉職の認知度、職業選択、作業療法のイメージに関する実態調査. 神奈川県立保健福祉大学誌. 17(1): 71-81, 2020.
- 34) 小藪真知子: 言語聴覚士教育の現状と今後の課題. 保健科学研究誌. 9: 1-6, 2012.
- 35) 熊崎大輔, 岩見大輔, 三原修他: 一般市民に理学療法はどれくらい知られているのか?. 第51回近畿理学療法学会大会. 2011.
- 36) 重本津多子, 室津史子: 看護学生の看護に対するイメージおよび入学動機と職業的同一性形成との関連. 医学と生物学. 157(1): 61-69, 2013.
- 37) 藤縄理, 水野智子, 谷合義旦他: 学生の専門職アイデンティティ確立を援助するための教育についての検討. 埼玉県立大学紀要. 5: 105-110, 2003.
- 38) 三橋幸聖, 長島潤, 渡部喬之他: 職業アイデンティティの確立に向けた、作業療法臨床参加型実習の導入. 作業療法ジャーナル. 51(7): 563-569, 2017.
- 39) 宮本礼子, 川又寛徳: 総合臨床実習経験を通じた作業療法学生の自己成長感を涵養する成因. 日本保健科学学会誌. 14(4): 223-234, 2012.
- 40) 山根伸吾, 三木恵美: 早期作業提供実習プログラムが作業療法学生の職業的アイデンティティに与える影響. 作業療法ジャーナル. 53(2): 195-200, 2019.
- 41) 佐伯大輔: 価値割引過程からみたセルフ・コントロールと衝動性. セルフ・コントロールの心理学 (初版). 高橋雅治編. 23-38. 京都市: 北大路書房. 2017.
- 42) 松井豊: 結果. 心理学論文の書き方 (改訂初版). 103-155. 東京都: 河出書房新社. 2010.
- 43) 浦上昌則, 脇田貴文: 重回帰分析. 心理学・社会科学のための調査系論文の読み方 (初版). 175-198. 東京都: 東京図書. 2008.
- 44) 藤原善美: 大学生のライフコース展望における自律性尺度の開発—自己決定理論に基づいて. 進路指導研究. 23(2): 11-18, 2005.
- 45) 山本仁司: 高校生はどのように志望する大学を選んでいるか. ベネッセ教育総合研究所. <https://berd.benesse.jp/koutou/topics/index2.php?id=2583> (最終閲覧日2020/12/07)
- 46) 半澤礼之, 坂井敬子: 大学生における学業と職業の接続に対する意識と大学適応—自己不一致理論の観点から. 進路指導研究. 23(2): 1-9, 2005.
- 47) Ryan RM, Deci EL: Intrinsic and extrinsic motivations — Classic definitions and new directions. Contemporary Educational Psychology. 25: 54-67, 2000.
- 48) 鹿毛雅治: 学習意欲再考. 現代のエスプリ. 333: 105-113, 1995.
- 49) 鹿毛雅治: 学習意欲とは何か. 学習意欲の理論 (初版). 1-33. 東京都: 金子書房. 2008.
- 50) 大橋ゆかり, 吉野貴子, 本多陽子他: 臨床実習教育が学生の職業的アイデンティティ形成に及ぼす効果. 理学療法学. 33(6): 311-317, 2006.
- 51) 落合幸子, 紙屋克子, 野々村典子他: 教師からの授業メッセージと職業的アイデンティティとの関連. 茨城県立医療大学紀要. 8: 69-77, 2003.
- 52) 近藤知子, 大松恵子, 西方浩一: 作業療法学生は作業科学授業をどのように受け止めたか—職業的アイデンティティに及ぼす影響. 作業療法. 29(2): 195-206, 2010.



- 53) 村田和香：OT学生は臨床実習後にどのように職業的アイデンティティを高めているのか. 作業療法ジャーナル. 43(3):217-222, 2009.

## **An Examination of the Factors that Affect the Learning of Occupational and Speech Therapy Students**

**Mika Suto<sup>1)</sup>, Kyoichi Hiraoka<sup>2)</sup> and Yoko Ishii<sup>1)</sup>**

1) Hirosaki University of Health and Welfare, School of Health Sciences, 3-18-1, Sanpinai,  
Hirosaki-shi, Aomori, 036-8102, Japan

2) Hirosaki University of Health and Welfare Junior College, 3-18-1, Sanpinai, Hirosaki-shi,  
Aomori, 036-8102, Japan

### **Abstract**

The purpose of this study is to examine the factors that promote the learning of university students in the Departments of Occupational and Speech Therapy. We conducted questionnaires reported in previous studies that dealt with learning, that is, ‘the course-selection process’, how clearly students imagine the work of a rehabilitation therapist, their motivation to become rehabilitation therapists, their professional identities, and their capacities for self-control. First, we reveal the characteristics of these variables for students in the two departments. Next, we developed the hypothesis that these variables facilitate three learning strategies: cognitive strategies, meta-cognitive strategies, and motivational regulation strategies. The results of a multiple regression analysis largely supported our hypothesis. That is, the images held by students regarding the work of a rehabilitation therapist affected the way they feel about becoming one. This mindset was a major determinant of their professional identity. And, these three variables brought the active use of the three learning strategies to the fore.

We reached the conclusion that developing professional identity is important, particularly in rehabilitation education. We therefore suggest that educators in university departments of rehabilitation work to develop the images steadily students have of the profession, because it has been shown that it is difficult for students to gain a sense of the uniqueness and expertness of the rehabilitation therapists. They should also consider the changes that occur in a student’s mind, presupposing the various processes by which the student enters the university. If implemented, these suggestions could have a positive impact on the development of students’ professional identity, encouraging them to study further on their own initiative.

Keywords: university students studying to be rehabilitation therapists, professional image, motivation to become a rehabilitation therapist, professional identity, learning strategies